第３章　障害者のＩＣＴ利活用による社会参加の効果

１．本人への効果

ICT の利活用による社会参加や就業を行うことにより、障害者本人に以下のような効果が生じている。

(1)情報入手機会の拡大

健常者でも同様ではあるが、ICT を利活用することによって、情報入手の機会が拡大している。これまで情報入手のチャネルが限られていた障害者では、特にその効果は大きい。パソコン等により、情報入手の機会が改善されたことを実感することにより、さらに情報を入手したい、知りたいという意欲を高めることにも繋がっている。また、ICT により世界が広がったという指摘もあった。

＜事例調査で得られたコメント＞

- 失明によって新聞や本を読むことができなくなった障害者が、読み上げソフトを使うことで、インターネットのニュースサイトのニュースを毎日聞くことができるようになった。（視覚障害）
- パソコンを利用できるようになって、得られる情報がこれまでと全く違うと感じるようになり、さらにいろいろと調べたい、知りたいという意欲がでてきた。（視覚障害）

(2)コミュニケーションの拡大

①ネットワークを通じたコミュニケーションの拡大

ICT を利活用することにより、人とのコミュニケーションが容易になっている。従来は、コミュニケーションを行うにも他人の助けを必要としていたことも多かったが、ICT 機器を使うことにより、人を介さずに直接コミュニケーションが行えるようになっている。仕事を行う上でも、電子メールを活用することによって、顧客とのコミュニケーションが行いやすくなったという事例もあった。

さらに、電子会議、掲示板、ブログ、メーリングリスト等とコミュニケーションに使える手段も多様化しており、人との繋がりやネットワークの輪が広がっている。わからないことや困ったことがあった場合でも、ネットワークを通じて、他の人から教えてもらうことやアドバイスを受けることができる。そのため、独学で試行錯誤をしているよりも、より効果的に ICT 機器の使い方等を学んだり、適切なソフトウェアを見つけたりすることが可能になっている。

また、様々な人と知り合い、交流することによって、視野が広がるといった効果も得られている。その結果、地域に対する関心が高まり、地域活動に積極的に参加するようになるといった行動に繋がっているケースもある。

＜事例調査で得られたコメント＞

- 障害者同士であってもインターネットでダイレクトに会話することができる。人と人とをつなぐ機器として可能性をもっている。パソコンを始めたことが社会参加に繋がった。（聴覚障害）
- ICT 機器により、人を介さずにコミュニケーションが行えるようになった。（視覚障害）
- パソコン通信により、人との繋がりが生まれた。わからないことを質問すると、知っている人が答えてくれ、独学で勉強するよりもわかりやすい。（肢体不自由）
- メールを使用することにより、外出しなくてもコミュニケーションができる。様々な人と知り合い、視野が広がった。その結果、地域への関心が高まり、地域活動に積極的に参加するようになった（肢体不自由）。
- インターネットの普及以前にパソコン通信をやっていた。障害者関係のフォーラムで知り合った人たちから影響を受け、社会参加活動に興味を持つようになった。（聴覚障害）

②ＩＣＴ利活用による社会参加、就業を通じたコミュニケーションの拡大

ネットワーク上でのコミュニケーションだけではなく、ICT 利活用による社会参加や就業を通じて、リアルな場での人との出会いも拡大している。

ICT 研修講師として働くことによって、これまで接点のなかった異なる障害をもつ人との接する機会が生まれ、接し方や学び方を学んだという事例もあった。

また、ホームページの記事の取材等のために地域の店等に出かけて行くことにより、地域住民の障害者に対する理解が深まったといった効果も指摘された。

＜事例調査で得られたコメント＞

- 仕事を通じて人との出会いが生まれる。（肢体不自由）
- 人と接するのが楽しい。コミュニケーションをとることはすばらしい。（肢体不自由）
- これまで異なる障害をもつ人と接したことがなかった。講習会を通じて、接し方、話し方を学んだ。（肢体不自由）

- ホームページの記事の取材等のために地域の店などに出かけることがある。障害者であることを言わずに取材に出かけると、はじめは驚くが、健常者とあまり変わらないことを理解してくれる。（肢体不自由）
- 電子メール、メーリングリストで広汎に連絡をとれることは、社会活動の基礎。自らインターネット等で調べものができ結果を発信できることも効果を生んでいる。（聴覚障害）

(3)意欲の喚起

パソコン等の ICT 機器を使うことで、他人の力を借りずに自分一人でできることが拡がっていることを実感することが、より多くのことを行えるようになりたいといった意欲の喚起に繋がっている。

また、ICT 研修等で、自分と同じ障害者が ICT を使って活躍している姿を見ることで、自分にもできるのではないか、自分もそうなりたいと思って研修に積極的に参加するようになったケースもある。

＜事例調査で得られたコメント＞

- パソコンが使えるようになったことで、手紙を書くなど自分でやりたいことがでてきた。（肢体不自由）
- 障害者が研修の講師をしているのを見て、自分もそうなりたいと思い、研修等に積極的に参加するようになった。引きこもりがちだったのが、講師に教わりたいという気持ちから外出することも多くなった。（視覚障害）

(4)就労機会の拡大

①仕事の能力の補完

ICT 機器は、障害者が仕事をする際に他の人とのコミュニケーションを図り、連携して仕事を行う上で大きな役割を果たしている。ICT 機器を活用することにより、他の人や通訳などのサポートを受けなくても自立して仕事が行えるようになっている。また、ICT 機器を活用することにより、以前より容易に仕事ができるようになり、トラブル等も減少するという効果も得られている。

＜事例調査で得られたコメント＞

- 仕事をする上で ICT 機器は必須である。ICT 機器は他の人と同じような役目を果たす上での壁を打ち破るための道具である。障害者が健常者と同じ土俵に立つための機会を与えている。（視覚障害）

・ ICT 機器の利用により、仕事がずっと容易になった。仕事が簡単になり、トラブルが無くなったことを喜んでいる。（肢体不自由）

②柔軟な勤務体系の実現

テレワークにより在宅で自分の都合にあわせて働くことが可能になっている。障害のために、通勤し決まった時間に働くということが難しかったが、テレワークにより自分の都合にあわせて働くことが可能になった。

また、テレワークであっても、テレビ会議システムや画面共有機能を使うことによって、互いの顔を見ながら指導を受けることが可能になっているケースもある。

さらに、起業を行う上でも ICT の活用は有効である。重度の障害になるほど、企業に就職することは難しくなる。そのため自分で起業することが選択肢の一つとなり得る。その際、アフィリエイトやドロップシッピング[6]等を利用することによって、起業に向けたハードルを低くすることも可能であろう。

＜事例調査で得られたコメント＞

・ テレワークでは通勤が必要なく、自分の都合にあわせて働くことが可能であることから、仕事ができるようになった。(肢体不自由)
・ テレビ会議システムや画面共有機能により、センターのスーパーバイザーとお互いの顔を見ながら、いつでも指導を受けることができる。（肢体不自由）
・ 通勤だけでも疲れてしまい就職は無理だと感じていた。特に、障害が重度になるほど、企業に就職することは現実的ではないと思われる。そのため、自分で起業しようと考え、ネットショップを立ち上げた。ネットショップであることから、遠方からも注文をしてくれる人がいる。また、ほとんどが人の紹介や口コミで広がっており、ICT の活用の効果が大きい。（肢体不自由）

③職域の拡大

ICT の利活用により職域が広がっている。特に、視覚障害者の場合には、以前は、伝統的な鍼・灸・あんま・マッサージといった職業に職域が限られていたが、ICT の活用によって、事務系の仕事やプログラム開発等の仕事等に従事することが可能になっている。

[6] EC（ネットショッピング）サイトの運営にあたって、自分では商品在庫を持たず、注文を受けた時点でメーカーや卸売業者へ発注、注文主への商品発送を依頼するという商取引形態。

また、自ら起業するという選択肢も ICT の活用によって、実現に向けたハードルが低くなっている。

＜事例調査で得られたコメント＞

- 以前は視覚障害者の職業として鍼灸程度しかなかったが、現在では事務系の仕事やプログラム開発等の仕事の行えるようになっている。（視覚障害）
- かつてはコミュニケーションのない仕事がほとんどだった。最近は電子メールなどもあり、大切な仕事を任されるようになってきている。（聴覚障害）
- 仕事上では、ICT の効果を実感している。CAD のサポートもメールで依頼している。問い合わせする際、画面の動きをキャプチャーすることもできるようなった。（聴覚障害）

(5)ビジネススキルの向上、実績作り

ICT 研修や企業への就職等により、ビジネススキルの向上を図ることができている。社会生活の基本やチームワークを学ぶことや、管理方法等のノウハウを体系立てて修得することが可能になっている。

また、ICT 研修講師やシステム管理者等の職に就いているという実績を作ることが、自分が理想とする職へ就くためのステップにもなっている。

＜事例調査で得られたコメント＞

- これまでは管理なども自己流であったが、企業に就職することによって、どのように考えて Web サイトを構築していくのかといった情報を得ることができた。（肢体不自由）
- IT 講習を通じて、ビジネス競争力の土台を築くこと、チームワークを学ぶことができた。（視覚障害）
- 現在は IT 知識を活かしシステム管理者の仕事に従事している。自分の理想とする仕事（自分でシステムを構築する）に向けた実績作りとなっている。（視覚障害）

(6)社会参加活動や就業による自己実現、生きがい

①精神面への好影響

ICT の利活用による就業を行うことによって、自信がもてるようになる、前向きな考え方になるといった効果が得られている。

研修講師等として、自分が覚えた知識を教えられること、人に頼られるようになる

ことが嬉しく、また研修を通じて様々な人と触れあうことが楽しみにもなっている。また、講師をしていると同じ障害を持っている受講生から励まされるといったこともあり、講習を通じて元気をもらっているという感想もあった。

また、就業できたことにより内面的に自信が持てるようになり、考え方が前向きになる、外出機会も増え社交的になるという効果もある。

健常者とともに働くようになることで、コンプレックスを感じなくなったというケースもある。

＜事例調査で得られたコメント＞

- 自分の覚えたことを他の人に教えられるようになるということが生きがいになっている。（視覚障害）
- プログラム開発、システム開発の仕事に楽しさを感じている。（精神障害）
- 講師などに呼ばれるなど、人に頼られるようになることが嬉しい。（肢体不自由）
- 再就職できたことにより、内面的に自信がつき、前向きになった。外出機会が増え社交的になった。（視覚障害）
- 講習会に参加することで友達も増え、同じ障害の人と出会うことにより、障害は自分だけではないと前向きに思えるようになった。（視覚障害）
- 講師をしていると、同じ障害を持った人から頑張ってくださいと声をかけられ感動した。（肢体不自由）
- これまで健常者が多い生活環境を知らなかった。狭い生活の中でコンプレックスを持っていたが、今では健常者と働くことができる喜びを感じている。（肢体不自由）

②経済面への好影響

ICT 機器の活用により就業することによって収入が得られるようになる。家族の経済的負担を軽減することができた、新しい生活の土台を築くことができたといった効果が得られている。

＜事例調査で得られたコメント＞

- ICT 機器のおかげで就業でき、これまでほど家族からの金銭的援助を必要としなくなるだろう。（視覚障害）
- 就業できたことにより、新しい生活の土台ができた。（視覚障害）

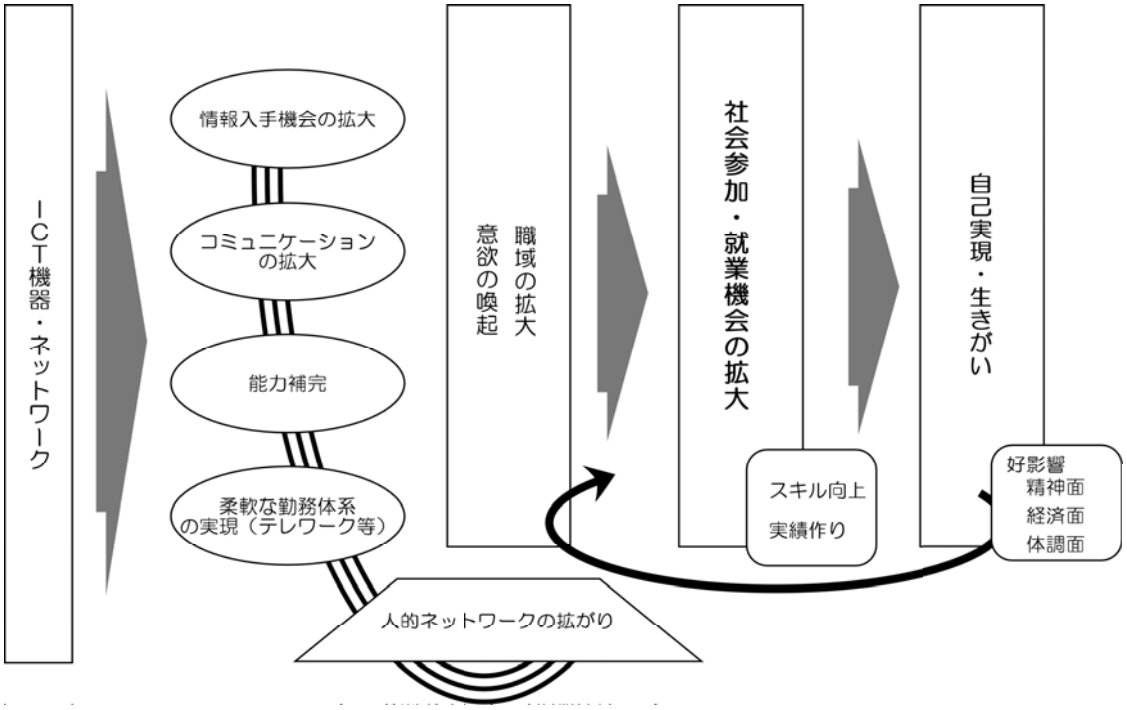
③健康面への影響

就業することにより、生活にハリが出て体調にも好影響を与えるようになっている。病院に行く回数が減るといった効果も生まれている。

＜事例調査で得られたコメント＞

・　仕事を始めたことにより、生活にハリが生まれ体調も良くなっている。仕事のことを考えて、夜早く寝るなど体調面にもより気を使うようになった。（肢体不自由）

図表3-1 ICT利活用の効果（本人）



２．周囲への効果

ICT を利活用した社会参加や就業をすることによって本人だけではなく、家族等の周囲にも良い影響が生まれている。

(1)家族の安心・負担の軽減

ICT を利活用して就業が可能になったことにより、家族に安心を与えることができるようになっている。また、家族による金銭的な援助の必要性も軽減する。

＜事例調査で得られたコメント＞

- 家族に自分が働いている姿を見せられることが嬉しい。健康面でも改善が見られ、家族を安心させることができた。（肢体不自由）
- 電子メールやウェブカメラにより家族とのコミュニケーションが深まり、以前より、家族も安心している。（聴覚障害）
- 就業することにより、これまでほど家族からの金銭的援助を必要としなくなるだろう。（視覚障害）

(2)周囲への波及効果（ＩＣＴ機器利用の拡がり）

障害者が ICT の利活用を行うことが、家族などの周囲の人の ICT 機器利用に繋がるといった効果が生まれている。

＜事例調査で得られたコメント＞

- 家族にパソコンの利用が広がった。父もインターネットを利用するようになり、コミュニケーションを図ることができる。（肢体不自由）
- 点字教室に参加し他の生徒と交流する中で、他の生徒にもパソコンに取り組む人が増えた。（視覚障害）

３．地域への効果

(1)他の障害者に対する自己研鑽等の動機付け

障害者が ICT を利活用して社会参加・就業している姿を見ることで、地域の他の障害者が ICT 利活用に取り組むきっかけに繋がりやすい。身近なところに目標となる人がいることで、自分もできるのではないかといった動機が生まれやすい。

＜事例調査で得られたコメント＞

- ICT 研修の講師が障害者だと、受講者の受け取り方が異なる。大きな動機付けとなる。（団体/機関）
- 身近なところに目標となるような人がいることで、他の障害者の取り組みのきっかけとなる。（団体/機関）

(2)地域の共同意識、コミュニティ醸成

①障害者に対する地域の理解の広がりと深まり

障害者が ICT を利活用した社会参加や就業を行うことを通じて、地域社会との接点が生まれる。これまでは触れあう機会が少なかったことから、お互いの理解が不足しているところがあったが、実際に接する機会が生まれることで、理解が深まっている。

＜事例調査で得られたコメント＞

- 地元の高校生に仕事を体験してもらう場で、障害者が講師となり、テレワークに関するオンライン遠隔講座を行ったところ、高校生にも好評であった。（団体/機関）
- ホームページの記事の取材等のために地域の店などに出かけることがある。障害者であることを言わずに取材に出かけると、はじめは驚くが、健常者とあまり変わらないことを理解してくれる。（肢体不自由）

②地域のコミュニティ作りへの貢献

障害者や子育て中の主婦等、外に働きに出ることが難しく、仕事を諦めていた人がテレワークを通じて、仕事に就けるようになった。地域に雇用が生まれるといった金銭的なメリットもあるが、それ以上に、テレワークを通じてこれまで社会参加が難し

かった住民の社会参加が可能になったこと、これまで繋がりのなかった住民の間にコミュニティが生まれたこと、地域としての共同意識が醸成されたことなどの効果が生まれている。

＜事例調査で得られたコメント＞

・　これまで仕事をすることが難しかった障害者、主婦などが地域でテレワークに取り組むようになった。報酬による金銭的なメリットよりも、社会参加の実現、人との繋がり、地域の共同意識の高まり等のお金では得られない効果が地域に生まれている。（団体/機関）